

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 13 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24320039

研究課題名(和文)旧東欧地域における「演歌型」大衆音楽の比較研究

研究課題名(英文)Enkaesque Pop-folk music genres in the East European countries

研究代表者

伊東 信宏 (Ito, Nobuhiro)

大阪大学・文学研究科・教授

研究者番号：20221773

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 10,000,000円

研究成果の概要(和文)：ブルガリアの「チャルガ」は、「マネレ」(ルーマニア)、「ターボフォーク」(旧ユーゴ諸国)などのポップフォーク(民俗的大衆音楽)と並んで、1990年代以降バルカン諸国に特有の社会現象であり、同様の現象は日本の「演歌」をはじめとしてアジア各国にも見られる。本研究はそれら諸ジャンルの比較を行い、その類似と差異をあきらかにすることを目指してきた。これまでに大阪、東京などの諸都市で、8回の研究会を開催し、20の報告が行われた。2017年にはこの問題に関する国際会議を開催する予定である。

そこでは上記諸ジャンルの社会的文脈を検証し、歌詞や音楽構造の分析が行われた。日本語による単行本出版が準備されている。

研究成果の概要(英文)：Chalga in Bulgaria, along with other types of pop-folk music, such as Turbo-folk in Serbia and Manele in Romania, has been a characteristic phenomenon since the 1990s in the East European Countries. On the other hand, we can find similar phenomena in Asia: Enka in Japan, Trot in Korea, Dangdut in Indonesia and so on. This project have tried to organize a research group, aiming at comparing these genres, and making clear the similarities and differences of each genre. We had 8 meetings with 20 presentations in Osaka, Tokyo, Nagano and Nagoya and are preparing an international forum in 2017 on this topic.

There we explored the social context of these genres, analyze the structure of the lyrics and music and a book on this topic will be published in 2016-17 in Japanese.

研究分野：音楽学

キーワード：東欧 演歌 チャルガ ポップフォーク ターボフォーク マネレ 大衆音楽

1. 研究開始当初の背景

「東欧にも演歌がある」ということに気付いたのは、約十年前、ブルガリアでの体験からだ。それが「チャルガ」と呼ばれるもので、90年代以降、ブルガリアでは爆発的な人気を誇っている、ということは知識としては知っていたが、それが目の離せない面白いものである、ということはこの時初めて意識した。その時点で、このジャンルの研究について言うと、(現地では幾つか興味深い考察も出始めていたものの)日本語では皆無だった。しかしブルガリアのみならず近隣諸国の同様の音楽を聴き続けていると、音楽学の対象として、これはきわめて興味深いものなのではないか、と考えるようになった。

大衆音楽というものは、そもそも人々の欲望を如実に映し出すものだが、これら東欧各国で流行している民俗的大衆音楽(それを筆者は後述のとおり「東欧演歌」と名付けた)は、当時東欧各国が体験しつつあった社会主義から自由経済へという現代最大の社会変革を見事に映し出している。ここでは高価な車ときらびやかな宝石、最新のモードと奔放な性が歌われながら、その一方でそんな新しい生活への戸惑いや疑いも同時に表明される。音楽はオリエントとオクシデントの間で揺れ動く。新たに流入した欧米のポップミュージック(特にドラムスとエレキベースによるリズムセクション)が模倣される一方で、ただのイミテーションでは済まずに突如オリエンタルな響きが噴出する。各国の似たようなジャンルは、意識的/無意識的に互いに引用しあい、しかも互いの差異を誇張しようとする。

ここには現代の音楽学が答えねばならない問いが渦巻き、我々を挑発している。本研究は、そのような挑発に対する反応である。

2. 研究の目的

本研究では、こういった新しいジャンルを敢えて「演歌型」大衆音楽と名付ける。これは、「チャルガ」(ブルガリア)、「マネレ」(ルーマニア)、「ターボフォーク」(旧ユーゴ諸国)といったジャンルの音楽が、民俗音楽(民謡)と欧米ポップスの奇妙な混合体である、という点で、日本の演歌と或る意味で似ているからであり、そして何より音楽的に共通点が多いからである。発生の時期やきっかけこそ異なるが、広い意味では西洋音楽が世界各地のローカルな民俗文化にショックを与え、そのショックから生み出された音楽として、日本の「演歌」とブルガリアの「チャルガ」は比較し得る。

このような東欧圏の「演歌型」大衆音楽は、1989年の体制転換の後、同時多発的に生まれ、若者に絶大な人気を博してきた。この種のジャンル専門のテレビ局、ラジオ局、レコード会社、プロモーターなどが複数存立している国もあり、変質しつつあるとはいえ今でも人気は高い。

しかし一方で、このような音楽には眉をひそめるインテリも多かった。金、異性、ドラッグなどを主題とする歌詞は露悪的であり趣味が悪い、と非難されてきたし、扇情的な踊りや衣装も鬻ぎを買ってきた。今もブルガリアの国営放送は「チャルガ」を放映しない。また、同じ旧東欧地域にあっても、ルーマニア以南の地域(ブルガリア、旧ユーゴの諸国)ではこのような新興ジャンルが一樣に人気を博しているのに対して、ハンガリー以北(チェコ、スロヴァキア、ポーランド)ではそのような現象が見られないことも注目される。

これら様々な問題を洗い出し、現地の文脈に即して読み解き、諸ジャンル間の比較を行い、個々の楽曲の歌詞や音楽を分析することによって、「東欧演歌」の諸問題を解明することが本研究の目的である。

3. 研究の方法

本研究の、具体的な方法は、次の通りである。まず、各年度2～3地域について、現地での調査を行った。これは、それぞれの地域における大衆音楽のフィールドワークという性格を持つが、同時にプロデューサー、歌手、メディア関係者、および聴衆に対する面接調査なども行った。これと並行して、年度毎に1～3回程度の研究会を開催し、前記の現地調査における成果を共有し、議論を行う。さらにそれらの議論を踏まえて、国内、国外の学会、研究会などで発信する。

なお、本研究課題については、研究開始時点で、すでに予備的な概観、および調査項目の整理などが始まっており（民間の助成金による）研究開始段階でそれを利用することができた。したがって、まず諸ジャンルに関する予備的概観を行ったうえで、現地における調査を行い、その成果を研究会等において共有し、議論を重ねて、国内外に発信する、ということになった。

4. 研究成果

A) 調査は、ブルガリア、セルビア、チェコ、ポーランド、ハンガリー、クロアチア、ルーマニア、トルコの各地について1～2回程度の現地調査を行い、音楽家への聞き取り調査などを実施した。

また、研究会は4年間で8回開催し、合計20件の報告を聞き、議論を重ねた。研究会は、大阪を中心としたが、それ以外にも東京、名古屋、長野などを会場とした。発表者は、研究代表者、研究分担者、そして若手の研究協力者が行った。より小規模なフォーラムとして、ゲストを招き、専門家の話を聞くということも多かった。

このような議論を経て、「東欧演歌」の定義を確定し、それぞれのジャンルの社会的文脈を検討し、音楽や歌詞について分析を

行った。

さらに国内の学会において、「東欧演歌」をテーマとするフォーラムを開催し、問題提起を行ったほか、平成26年9月の民族芸術学会第30回全国大会において研究代表者が「バルカン演歌を渉猟する」と題する基調講演を行い、これは機関誌「民族芸術」に論文として掲載された。

国外の学会においても、研究代表者がセルビアの音楽学会において発表を行ったほか、最も積極的な研究協力者であった上畑史が国際音楽学会東アジア部会で本研究課題に関連する発表を行い、国際的な発信も果たした。なお、上畑はその後この研究課題に関連するテーマで博士論文を構想し、現在執筆中である。これが完成すれば、日本語では初めての「東欧演歌」に関する博士論文ということになるはずである。

B) 以下に、我々の議論を経て確定した「東欧演歌」という語の定義について、整理しておこう。

ここで「東欧演歌」と呼ぶのは、1) 中東欧地域の大衆文化において、2) 1989年の東欧諸国の体制転換以降の時期に流行し、3) 発声法や節回しの点で、多少とも民俗音楽的な要素を含む諸ジャンルの音楽、ということになる。つまり、1) が地域の限定、2) が時代の限定、そして3) が内容的な限定ということになるが、このうち3) については、もう少し細かく説明すれば次のようになる。

a) 音楽的要素（旋律／リズム／発声法／楽器／装飾法）、視覚的要素（衣装／踊り）、トピック的要素（歌詞の主題／人物／場所／事件）など様々な点に民俗的なものと関連を持つ、あるいは暗示したり強調したりしている。

b) 「オーセンティックな」フォークロリズムをあえて強調せず、事実上の標準で

ある欧米のポップミュージックと関連づけようとしている。つまり、旋法やリズムは単純化され、ベース&ドラムスのリズムセクションが加えられ、その都度のファッションが取り入れられる。

c) 社会の都市化、工業化、非一次産業化に伴って生まれた新しい「庶民」が主な消費者であり、彼らの心性に寄り添うセンチメントが主流である。おそらくはその故にインテリには嫌われ、社会階層的に上層に属する者には軽蔑される。

C) さらにこれらの研究を通じて明らかになった今後の課題についても列挙する。

1) 東欧演歌に類するジャンルはルーマニア以南に限って流行しており、それより北の地域、すなわちハンガリー、ポーランド、チェコ、スロヴァキアなどには見られない。なぜこのような差が生じるのかについて、考えてみる必要がある。今のところ筆者は、それがオスマン・トルコの支配が長かった地域と重なることに注目している。この種の音楽が胚胎するためには、民衆の中に、トルコ的なものとの親和性が、ある程度以上必要なかもしれない。

2) 一方で、アジア諸国における類似した音楽(上でも触れた日本の「演歌」、韓国の「トロット」、インドネシアの「ダンドウツド」、タイの「ルークトウン」など)との関係は、どう考えるべきか。それはどちらかがどちらかへと波及した影響関係なのか。あるいは同時期に別々に起こった並行現象(その場合にこの種の音楽を生じさせる社会的条件とは何か)なのか、それとも全く無関係と考えるべきなのか。

3) 東欧演歌においてロマは重要な役割を果たしているが、それは聴衆の意識にとってどのような意味を持つのか。彼らは、オリエンタルなもの、外的なものに見なされているのか?あるいは自国の文化に不可欠

な、内的「オリエン」の表象と見られているのか。また、ロマは歌手、パフォーマーとしては重宝されているが、一方でプロデューサーする側、あるいはレコード会社などの側に回ることは稀である。この搾取構造をどのように捉えるべきか。

4) 東欧演歌に類する各国のジャンル間には、様々な接触が起こりつつある。ある歌が、歌詞だけ翻訳されて、別の国でもヒットする、ということがしばしば起こり、また隣国のスター同士がデュエットを発表するという機会も増えている。一方で、それぞれのジャンルごとに好まれるビートの種類に差があり、プロデューサーたちはそれを意識してもいる(この点については、筆者自身が行った調査において、ブルガリアの「ポップ・フォーク」における2大系列の一翼を担うレコード会社ディアパソン社の社長ネンチョ・カマソフ氏が語っていた(2013年5月1日、ソフィア)。これらの微妙な関係について、国境を超えた、広範囲で慎重な検討が必要であろう。

5) 東欧演歌は、別のシステムが作動していた場所(たとえば1989年以前の東欧諸国)で、そのシステムが崩壊して世界的な市場経済に呑み込まれた場合に何が起こるか、という問題についての、文化に関するモデルケースと考えることもできる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計5件)

伊東信宏「東欧演歌研究序説『民族藝術』第31巻、2015年4月、pp.52-56.

浜崎友絵、トルコにおける『アラベスク』の生成と展開、『信州大学人文科学論集』、査読なし、49巻、2015、9-29.

Fumi Uehata, "Turbo-folk in Serbia, Performance of pleasure and pain of the Balkans", *Handai Ongaku Gakuho Special Issue 2015*, 査読アリ、169-170.

上畑史「セルビアにおけるポピュラー音楽史概観」『民族藝術』第30巻、2014年、pp.152-161。査読あり。

〔学会発表〕(計6件)

Fumi Uehata, "Music in the folk spirit, conflicting interpretations of Orientalness in modern Serbia". International Musicological Society, East Asia Biennial Conference, 6th December, 2015, Honkon.

伊東信宏「日本の演歌と東欧のポップフォーク」、7. Juli 2015, Institut für Japanologie, Heidelberg Universität.

伊東信宏「バルカン演歌を渉猟する」(民族芸術学会創立30周年記念大会公開シンポジウム「接触領域の芸術—美術・音楽・芸能」、民族学博物館講堂、2014年9月21日)

Nobuhiro ITO, "The Ecology of Folklore: The Case of Balkan Brass in Japan", *Safeguarding the Intangible: Cross Cultural Perspectives on Music and Heritage International Symposium*, including film screenings and concerts, Music Department, Goldsmiths, University of London Hosted by The Asian Music Unit (ASMU), 21st February, 2014.

Nobuhiro ITO, "Chalga and Enka: parallel phenomena on both sides of

Eurasia", *International Conference 'Beyond the East-West Divide: Rethinking Balkan Music's Poles of Attraction'*, Institute of Musicology of the Serbian Academy of Sciences and Arts, et. al. 29th September, 2013.

伊東信宏「東欧のポップ・フォーク—ブルガリアの「チャルガ」を中心に—」, 民族芸術学会第128回例会、2012年12月1日、大阪大学。

輪島裕介「東欧演歌は演歌か?」, 民族芸術学会第128回例会、2012年12月1日、大阪大学。

上畑史「セルビアにおけるポップ・フォーク史概観」, 民族芸術学会第128回例会、2012年12月1日、大阪大学。

〔図書〕(計1件)

伊東信宏「音楽におけるナショナリズム」『現代の起点: 第一次世界大戦』第3巻『精神の変容』岩波書店、193-214。

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

伊東 信宏 (ITO, Nobuhiro)
大阪大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：20221773

(2) 研究分担者

小島 亮 (KOJIMA, Rio)
中部大学・人文学部・教授
研究者番号：50410650

新免 光比呂 (SHINMEN, Mitsuhiro)
国立民族学博物館・准教授
研究者番号：60260056

奥 彩子 (OKU, Ayako)
共立女子大学・文芸学部・准教授
研究者番号：90513169

太田 峰夫 (OTA, Mineo)
宮城学院女子大学・学芸学部・准教授
研究者番号：00533952

輪島 裕介 (WAJIMA, Yusuke)
大阪大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：50609500

濱崎 友絵 (HAMASAKI, Tomoe)
信州大学・人文学部・准教授
研究者番号：90535733

(3) 研究協力者

上畑 史 (UEHATA Fumi)
大阪大学・大学院文学研究科・院生 (日本学術振興会特別研究員 DC)

阪井 葉子 (SAKAI, Yoko)
大阪大学・大学院文学研究科・招へい研究員